

## 改革のとき

会計理事 小山 正樹



第二次世界大戦が終わってからはほぼ50年が経ちました。その間大きな戦争もなく、概して世界はほぼ平和なときを過ごしてきました。その結果、国の内外を問わず政治、経済等の分野で制度疲労が目立ち各分野での改革の必要性がいられています。

このような状態になったのは科学技術の発展が一つの原因になっているものと思われます。たぶん、人間が科学技術をいまだ手に入れていなかった時代には、これほどの変化のスピードもなく、また必要もなかったものと思われます。

制度／社会システムと科学技術の関係はもっと追求されていいテーマだと考えられます。例えば、日本の政治改革は単なる政治制度の改革だけでなく、社会システムそのものの議論にまで及ぼうとしています。富の再配分への模索ともいえるべきものでしょうか。

しかし、社会システムはそこに存在する人々と人々がもつ慣習、組織あるいは人々にまつわるさまざまな要因がものごとを複雑にしているようです。特に組織については、それ自体がまるで生き物のように振舞うことがあります。戦後の日本の成長を支えたのは日本的組織であるといわれてきましたし、また現在の国内外からみた日本の問題もまさにこの日本的組織であるといわれています。

ひるがえって、我々の所属する電子情報通信学会は科学技術を研究する場と同時に組織でもあります。その組織が今ソサイエティ制という改革に向け準備中です。これは、富の再配分という言葉は当たらないにしても、何らかの意味で会員個人個人に有利、不利に働くことは免れません。特に、学会の財政をあずかる者としてみた場合、これ以上の会費の値上げが難しい現在、ソサイエティ制への移行がすべての会員にとってハッピーであるとは考えられません。

ソサイエティ制は単純にみれば、現学会の複数分割であります。そこでは、各種の委員会がより多く開かれることになるでしょう。そのためには事務局の稼働も増えることになるでしょう。すなわち分割損が存在することになるからです。

ぜひ、会員諸氏におかれましても、この改革が会員にとって等しくアンハッピーな学会でなく等しくハッピーな学会をもたらすよう御理解と御協力を頂きたいと思えます。